

## ロボットは考えるか

伊藤 公一 (笏康)

## Does Robot Think ?

Kohichi(Shakkoh) ITOH

### ABSTRACT

A new type of physicalism, called functionalism, has prevailed in the philosophy of mind. They maintain that some physical or chemical processes in brain have a function in the cognitive system of brain, and this functional system can be simulated by a computer. This type of physicalism is thought to be a revised version of the older "mind-brain identity theory", which failed to show the alleged identity empirically because of the lack of the suitable bridge concept between neuro-physical brain processes and occurrences of mental events. So they seem to hope "function" to bridge those concepts and enable them to reduce mental events to physical ones.

But this revised physicalism also seems to have a certain assumption that is inevitable to formulate their very assertion. It is that a machine can be said "doing an action" in the same sense as a man. So it is the matter how we evaluate the expression "a machine is doing an action". This essay intends to analyze this assumption and suggest that it comes from a semantical mistake, especially from confusion of action and movement.

本論文は文部省の科学研究費の助成を受けて行われた総合研究『科学と宗教』（昭和59年度、代表者 放送大学教授 大森荘蔵）の研究成果の一部である。

機械はどれほど人間に近づきうるかという問いがある。これは機械がどれだけ人間の行うことを行えるようになるかという問いであろう。そして特に、人間の脳の活動と同じことを行えるかどうかの問題となるとき標題のような問いが発せられるのであろう。しかしここに1つの陥りやすい誤解があると思われる。以下ではそれを指摘して、現代の心の哲学へのささやかな批判を試みることにしよう。

### I.

1人の主婦が汚れ物を放り込んで自動洗濯機のスイッチを押す。それだけの動作をしてしまえば彼女はその場に留どまる必要はない。その場を離れて食事の支度をしようと、植木に水を遣ろうと、間食をしようと、あるいは昼寝をしようとする。その洗濯機に任せておけば一定時間ののちには汚れが落とされ、余分の洗剤も濯ぎ去られ、さらに遠心脱水さ

れた洗濯物が仕上がってくるだろう。その間彼女は洗濯機の傍らで見張ったり、新たな操作を加えたりする必要はない。このようなときわれわれは「洗濯機が洗濯している」と言う。そしてこの類いの言いかたはごくありふれたものであり、われわれは「自販機がビールを売っている」、「水車が米をついている」、「機械が機を織る」などと言うのである。わたしがこの小論を通して検討したいのはこの種の言い方、つまり機械が～するという言い方の当否である。ただしあらかじめ断っておくが、わたしはこの言い方自体が誤っていることを主張したいのではない。ただわたしはこの言い方で表現されている事態はどのようなものなのかを分析し、それに照らしてみるときわれわれがどのような誤解に陥りやすいかを指摘しておきたいのである。

さて、機械が～するという言い方から生じる第1の誤解は、上の例で言えば「洗濯機が洗濯している」ときその主婦が洗濯していないと考えることである。つまり機械が～しているとき、その機械に動作を任せている人は～していないとわれわれは言いたくなるのである。たとえば洗濯機のスイッチを押したのち彼女が煎餅をつまんでいたとしよう。このようなときわれわれは、彼女は間食してはいるが洗濯してはいないと言いたくなる。だがそれは本当だろうか。それを考えるため、洗濯機が途中で動かなくなった場合を想定してみよう。そして彼女がスイッチをいじったり、洗濯物の位置を直したりして洗濯機を再び稼働させようとしたにもかかわらず、洗濯機がどうしても動かぬとしてみよう。しかもそれはその日のうちに仕上げしておくべき洗濯物であるとして。このようなばあい彼女はもはや洗濯機に頼ることなく、たとえばたらいと洗濯板で洗濯を遂行することになるだろう。

さてこのような状況の下で、彼女は洗濯機が故障で止まるまで（つまり間食をしていたとき）洗濯をしていなかったとしてみよう。すると彼女のこの一連の行動は一種不思議なものになる。なぜならたらいと洗濯板でごしごしと衣をもみはじめたとき、彼女は全く初めて洗濯を始めたことになるからである。そしてそれまでしていなかった洗濯を彼女がそのとき始めたのであれば、それまでのいきさつをわれわれが見ていたとしても、われわれは彼女に「なぜ今洗濯を始めたのか」と尋ねることができるはずである。しかしこの問いには或る可笑しさが感じられはすまいか。そしてじっさいそう尋ねてみよ。彼女はおそろく不思議そうな顔をして「別に今始めたわけではないわ、何でそんなことを聞くの」と言うにちがいない。

この種の問いのおかしさは、通勤電車が事故で止まって仕方なく歩き出した人に、「なぜ今通勤を始めたのか」と問う場合のおかしさではなからうか。あるいは扇風機が動かなくなってうちで扇ぎ始めた人に、「なぜ今涼み始めたのか」と聞いたり、スプレーガンが詰まって刷毛で塗料を塗り出した人に、「なぜ今塗装し始めたのか」と尋ねる類いのそれではなからうか。そしてこれらの問い方の可笑しさは、まさに「そのときからその人の行為が始められた」と言うことの可笑しさに由来することが見て取れるであろう。主婦の場合であれば、「わたしが今まで何をしていたかと思っていたの？」といういぶかしさがここにはある。つまり彼女（かれ）がそれまで何をしていたかは一一種自明のことからなのである。それにたいする答えはもう言うまでもあるまい。かれらはそれまでにも洗濯し、通勤し、涼み、塗装していたのである。逆に言えばここにあげた例はそれぞれ、最初あるか

たちで遂行していたことを、ある時点から別のかたちで継続遂行した場合なのである。洗濯機での洗濯をたらいと板でのそれに、電車での通勤を徒歩でのそれに、扇風機での涼みを団扇でのそれに、あるいはスプレーガンでの塗装を刷毛でのそれにと手だてを変えはしたが、かれらは元からしていたことを継続しただけなのである。それだからこそ、これらの場合に「その時点から始めた」と言うことにはある種の可笑しさ、あるいは質問の無意味さが付き纏うのである。かれらは最初から洗濯し、通勤し、涼み、塗装していたのである。ただかれらは最初もっぱら機械によって、そして途中から自分の身体を多く使うことによって同じ行為を遂行しただけなのである。

しかしかれらが機械によってあることを遂行していたあいだ、われわれはなぜかれらが当の行為をしていないと誤解したのだろうか。かれらは機械任せで「何もしていない」と言いたくなるのはなぜだろうか。それが次の問題である。そしてその答えの1つはおそらくこうである。われわれはその人が行為しているかいないかをかれ（彼女）の動作の多少で決めようとする根強い偏見がある。行為といえば動作がなければいけない。それゆえ動作する者こそ行為する者だと言うのである。このように考えるなら、とくにその人の受け持つ動作が殆どないばあい、その人は行為者の資格がないものとわれわれは考えがちである。洗濯機のスイッチを押して煎餅をつまんでいる人は洗濯していない、あるいは電車で揺られてぼんやりしている人は通勤していないと考えがちなのである。だが動作の多少と行為遂行の有無は別のことがらである。われわれの行為には動作を伴わぬものも多い。試験監督は不正を見つけてつまみ出す以外はただ座っているだけのこともある。しかしただ座っているだけだからと言って、そのひとがそのとき監督していないわけではない。得意先からの電話をただ待っている人が仕事をしていないわけでもない。出張の汽車の中で居眠りしているひとが仕事をサボっているのでもない。それどころか、ひたすら気配を消して物陰に潜まなければ遂行できぬ行為すらある。或る人がある行為をしているか否かは、かれの受け持つ動作が多いか少いかとは独立に定まる事柄なのである。

だが機械の発達とともに今まで身体で行ってきた行為動作を機械がするようになると、われわれはかれ（彼女）がその行為を機械に譲ってしまったと言いたくなる。つまりその動作をせぬ者はその行為もしていないのだと言いがちである。そのように考える人びとは、例えば次のように言うのである。「彼女は洗濯してはいない。ただ洗濯機のする洗濯を『気遣って』ただけだ。だから機械が不調になれば飛んで来るし、機械がどうしても動かぬときは手で洗いもするのだ」と。あるいは同様な発想から、「その人は間食しているあいだ洗濯はしていないが、洗濯機のする洗濯を『管理して』いるのだ」という言い方も出て来る。たしかにこの言い方には一面の真理がある。洗濯機が止まっても電車が動かなくなっても、洗濯や通勤を別のかたちで遂行しようともせぬ人はそれまで洗濯や通勤をしていたとは言えない。しかし「今・・・を始めたのか」という問いに対する反応から明らかのように、機械に動作を任せているあいだもかれらはただ「気遣っ」たり「管理し」たりしているだけではない。かれらはそれまで実際にその行為を遂行していたのである。

かれらがそれまで洗濯し、通勤し、涼み、塗装していたか否かは動作の多少によって、言わば量的な基準で機械的に定まる問題ではない。それはむしろ意味的な問題なのである。すなわちそれまでかれらがその行為をしていたかどうかは、むしろ「今・・・を始め

る」という言い方が有意味かどうかどうかで決定される意味的な問題である。行為の有無は動作の多少では決まらないのである。それにもかかわらずわれわれはそれらを混同し、動作の有無と行為の有無があたかも同じしかたで決められると誤解しがちなのである。だが大切なことは、現に生きて生活している時われわれが或る人の行為として認め、称賛や懲罰の対象にするのはまさにこのいみで認定された行為だということである。洗濯機が不調だからといってそれ以後何の対処もしなければ、件の主婦は「おまえは真面目に洗濯しない」と非難されるだろう。電車が動かなくてもそれ以上の努力をしなければ、その社員は「君は会社に来る気があったのか」と言われる。クーラーが駄目だから何もしなかったと言えば、「君は本当に涼む気があったのかい」と言われるだろう。行為者はその手段を変えてもその行為を遂行したと認められるからこそ、「もとから」その行為をしていたと言われるのである。

動作の多少が行為の有無と直接関係しないことを見るには、以前の例とは逆に身体運動の多いものから少ないものに移行する場合を考えることが1つであろう。もし自動洗濯機でする洗濯が当人の行為でなく、たらいと洗濯板でするのが当人の行為であるなら、最初たらいと洗濯板である程度仕上がった洗濯物を自動洗濯機に放り込む場合はどうだろうか。そのようなときわれわれは「なぜ君は洗濯をやめたのだ」と言わねばなるまい。しかしそれが明らかに可笑しいことは言うまでもないだろう。電車が再び動き出して、それまで歩いていた人が電車に乗ってもかれが通勤を止めたわけではなく、団扇で扇いでいた人がクーラーのスイッチを入れて扇ぐ手を止めたとしても涼むのを止めたのではあるまい。それと同様に「・・・をやめた」かどうか動作の多少によって定まることではないのである。

行為をしていたかどうかは、今はじめてその行為を始めた、そのときを限りにその行為を止めたということが意味を持つか否かで決まるのである。少なくともそれがわれわれが行為という事実を作り出し、それにもとづいて（それを根拠として）われわれの生活を営んでいる様式なのである。機械任せか自ら汗水たらしてかには関わりなく、ある行為がその人の行為か否かは意味的に決定されるのである。そしてそれこそが、われわれの生活の現実を作り出しているわれわれの暗黙の営みなのである。

## II.

自動洗濯機に動作を委ねている主婦もやはり洗濯していることにはかわりはない。その間煎餅をかじっていようと、昼寝をしていようとである。彼女はただ、煎餅をかじりながら昼寝をしながらなおかつ洗濯していたのである。それはちょうど通勤電車のなかで居眠りしている人もやはり通勤しており、エアコンで風を送らせて新聞を読んでいる人も涼んでいるのと同じである。しかし身体動作の多少で行為の有無を極めつけるのを第1の誤解とすれば、ここに指摘すべき第2の誤解がある。以下でそれを指摘することにしよう。

自動洗濯機で洗濯している主婦を、「洗濯している」と言いたくなかった理由を今1度考えてみよう。すると彼女が請け負う動作の少なさに加えて、彼女と洗濯機の空間的なへ

だたりという要因にわれわれは気づく。彼女は洗濯しているあいだ、動作の大半を請け負っている洗濯機から離れていた。そして（たとえば）煎餅をかじっているとき、洗濯機の動作に物理的影響を及ぼしてはいなかった。そのように動作するものと空間的に離れているとき、そして動作するものに物理的影響をおよぼしていないとき、われわれはその人が当の行為をしていないと言いがちである。裏を返せばわれわれはある人が行為しているか否かを、かれがその動作の場所において、しかもそれに直接手を下しているかどうかで決定しがちなのである。

しかしある行為にとって主要な動作が人間とはなれた場所でなされたからといって、その行為がその人の行為でなくなるわけではない。銃を撃って遠くの人を殺すばあい殺人行為を遂行したのは銃を撃った人であろうし、レントゲン技師はX線を避けて隣室から写真を撮り、爆破作業員は安全な場所まで退避したうえでビルを爆破するなど、主要動作が行為者からはなれた場所でなされることは多々ある。しかし前節と同様、それらの動作のなされる場所と空間的に接近していればかれらが行為者であり、離れていればそうではないと言うのは明らかにおかしいであろう。直接ナイフで刺し殺すのは殺人だが遠くから銃撃するのはそうではないとか、爆破場所にあくまでも居残らねばその人が爆破したとは言えないとか、そのようなことはないはずである。ナイフで殺すことを断念して銃撃に切り換えたからといって「殺人を止めた」のではなく、その逆ならば「殺人を始めた」のでもない。動作場所とはなれているか否かは行為しているか否かととは別問題である。

また動作にたいして物理的影響をおよぼしているか否かも、その人が行為者であるか否かととは別問題である。居眠りしながら電車通勤している人は、自分の乗っている電車に何の影響も与えていないであろうがやはり通勤している。寝転んで本を読みながらエアコンをつけている人は、エアコンに影響を与えぬまま涼んでいる。あるいは煮炊きの途中でその場をはなれる人も、火や器に影響を与えておらぬにもかかわらずやはり煮炊きしているのである。

それでは煮炊きのばあい、かれが他所に行っているあいだに火が消えてしまったばあいはどうであろうか。そのような場合、われわれはかれの煮炊き行為が行われなかったと言うのではないだろうか。たしかに火が消えたり器が壊れたりすれば煮炊きの動作は行われなくなる。そしてそのきっかけかかれの煮炊き行為も未完結に終わることになる。それはそのとおりであり、動作の消滅とともに行為の中途消滅もありうることをわたしは否定しようとは思わない。しかしそれはかれがもともと煮炊きしていなかったことではない。じっさいわれわれはかれの怠慢を責めるけれども、火の消えた時点でかれが「なぜ煮炊きを止めたのか」とは言わない。つまりわれわれはかれが煮炊きを止めたことを責めているのではなく、むしろ下手に遂行したことを責めているのである。殺人を止めたひとは殺人罪に問われないが殺人未遂は下手な殺人であるように、かれは下手な煮炊きをして失敗したのである。行為をして失敗することはもともと行為をしないこととは違う。煮炊きの途中でその場をはなれる人は煮炊き未遂の責めを受けることはあろうが、もともと煮炊きをしなかった責めは受けないであろう。そしてその場をはなれて影響を及ぼせなくとも、煮炊きが成功すればそれはかれの功績となる。そのいみで、動作に影響を及ぼしているか否かはかれが当の行為をしているか否かととは独立のことなのである。

このように動作が空間的に「散在」する行為の例を考察すれば、動作場所においてそれに直接影響を与える者が行為者であるという誤解は比較的克服しやすい。ある人がある行為をしているかどうかは、その行為にとって重要な動作がどこで行われるか、またその行為の遂行中にかれがその動作に物理的影響を及ぼしているかどうかとは別問題なのである。その行為をかれが遂行しているか否かは主要動作への物理的近接や影響関係によらず、ふたたび「意味的」な事柄なのである。しかしさまざまな機械・道具を使用した行為が増加するにつれ、また機械が高性能化し自動化するにつれ、われわれはこれまで述べた二つの誤解に容易に陥ることになる。じっさいわれわれは動作の大半を機械に任せられるようになり、機械の動作中にその場から離れられるようになり、しかも当人は機械の動作に物理的影響を及ぼさないことが多くなっていく。そしてそのようなとき、われわれは機械が人間と独立にそれ自体として行為できると言いたくなるのである。だがそこでは2つの推論が暗黙のうちになされている。1つはこれまで述べてきたもの、すなわち機械が動作をしているとき人間は当の行為をしていないというそれである。それについてはそれが正しい推論でないことをこれまで述べてきた。だがここに今1つの（言わばこれとは逆の）推論がある。以下の節でそれを検討してゆこう。

### III.

前節まで検討したように、ある人が行為しているか否かは動作の多少や「その場」性とは独立である。しかしわれわれは往々にして、その場で動作の多くを行う者を行為者と認定しがちである。そしてその基準にしたがうからこそ、機械それじしんの動作が少ないとき機械（道具）を行為主体とする言いかたはしにくくなる。じっさい1節の例で「洗濯機が洗濯している」と言う人も、手洗濯している主婦を見て、「たらいと洗濯板が洗濯している」とは言わないであろう。同様に工場の裁断機が稼働しているときわれわれは「裁断機が紙を切る」とは言うが、人が鋏で紙を切っているとき「鋏それじしんが紙を切る行為をしている」とは言わない。「水車が米をつく」とは言えるが、人がきねで米をついているとき、「かれの持つきねそれじしんが米をつく行為をしている」とは言わないのである。このように動作の「多少」と「直接その場」性という基準を暗黙に採用するばあい、われわれはその基準を満たすものは人間であろうと機械であろうと同等の行為者たりうると考える。それにたいし前2節でわたしが述べたのは、行為者であるかないかは必ずしもその基準で決まらず、むしろ一定の意味的な条件を満たすかどうかで決まるということであつた。

しかしここで今までの逆を考えて見よう。I、II節で述べたように洗濯機が洗濯していると言いたくするとき、わたしはこれまで「主婦が洗濯していないのではない」ことを述べてきた。みずからたらいと洗濯板で汚れ物をごしごしこする場合も、それを洗濯機に放り込んでボタンを押したのち他所で煎餅をつまんでいるばあいも、彼女は洗濯という行為をしていたのである。そのいみで彼女は洗濯機があろうとなかろうと洗濯することができたわけである。ところがここではその逆、すなわち彼女が存在しようとするまいと洗濯機は「洗濯している」と言えるかどうかを問題にしてみよう。

もちろんここで前述の基準にしたがって、当然そう言えるという意見があろう。だがそ

れは自らの定義に従えばそうなるということ以上ではない。またそのかぎりわたしは何の異議も差し挟むつもりはない。しかしここで必要なのは定義ではなく、われわれが行為者をどのようにして認定しているか、すなわちわれわれが「ある行為者による行為」という事実をいかに作り出しているかの自己分析である。それゆえわれわれは人間をいっさい前提しない機械の行為というものが考えられるかどうかを、現実にそくして虚心に考察せねばならない。

さてこれを考察するときに重要なのはマイケル・ポラニーも指摘した誤解、すなわち機械をたんなる物理的対象と見る誤解である。われわれは「人間機械論」という言葉に見られるように、機械の働きは物理・化学的な言葉で説明しつくされると考えがちである。しかしポラニーも言うように、機械の作動原理はたんに物理・化学的な説明では与えられない。つまりその機械が何をするためのものか、あるいはその機械が今何をしているかはその機械の動作を物理・化学的に記述しても一意的に定まるものではないのである。例えば算盤玉の上下運動を物理的に記述したからといって、そこからそれが「計算」のための動作であることは出て来ないだろう。算盤玉の上下によって何がなされているかはさまざまな場合が想定できるからである。あるいは玉が1個入ると15個の玉が出てくるパチンコ台があるとき、その内部機構の動作を物理・化学的に記述してもその機械が何をしているかは明らかになるまい。その台は娯楽のために用いられているのか、あるいはXプラス14という計算をしているのか、あるいはその他の何をしているのかは動作の物理的な記述だけから決定できないだろう。紫外線発生灯がともっていても、それが殺菌灯であるか化学反応の促進のためであるか、あるいはたんなる照明のためかは物理的記述からは分らない。機械の動作状況を物理・化学的に記述しても、その機械が今何をしているかは一意的に決まらないのである。

だが洗濯機が稼働しているとき、われわれはその動作が洗濯のためのものであることを疑わないのではないだろうか。たしかに「～機」と言われるものについては、われわれはその使用法をただ1つに限定し、その使用法がおのずから定まっていると断定しがちである。しかしそれは現在のわれわれの日常生活の脈絡がそうさせるのではないだろうか。それをいったん変化させるとき、われわれはその機械に現在予想もせぬような意外な使用があるのに気付くこともあるのではないか。どのように工夫された盗難防止装置も必ずその裏をかく盗賊が現れる。盗難防止装置が盗賊の手助けをしていることもあるのである。すでに有害と分った洗剤を入れて洗濯機のスイッチを押せば、洗濯機は衣類汚染機になりうるのである。そのように、どんな機械も逆用するという事は、機械がいかに動作しているかをどれほど（物理・化学的ないみで）精密に述べたとしても、その動作記述によってその機械が何をしているかは定まらぬことを裏書きしている。機械機構の物理・化学的記述は、その使用の可能性を示唆することはあっても、その機械が今現在何をしているかを決定しない。そしてそのいみで、「機械が～している」という言い方が一定の意味を持つためには機械それじしんの記述以外のものが必要なのである。

それでは機械が何をしているかはどのようにして決定されるのであろうか。それはその機械が稼働している脈絡によって定まると言えよう。全く同じ動作もそれが置かれた脈絡しだいその意味が異なってくるからである。しかしここで大切なことは、そのような脈

絡には必ず何らかの人間が含まれているということである。算盤が計算に使われているか、マラカスのような楽器として用いられているか、一種の「ころ」として使われているか等々はその脈絡に含まれる人間との関係から定まる。運動物体を探知する装置を盗難防止に用いているか盗みの手助けに用いているかは、まさにその脈絡に含まれる人間によって決まる。水車を米つきに用いるか、そのつき音の規則性をストップウォッチに使用するかはそれを使用する人間次第である、等々。このように、機械の動作に一定の意味を与えるには、それがどう使われているかを定める人間が介在せざるをえない。換言すれば、機械の動作の意味を与えるためには何らかの人間、すなわちその機械の使用者が必要なのである。つまり機械の動作の意味は「ある人がそれを用いてある行為をする」という脈絡の中ではじめて決定されるのである。それゆえ使用者を前提しない機械はその動作に意味を与える者が居ないことになる。それゆえそのような状況下では、機械はもはや一定の意味を持った動作をする「機械」ではなく、たんに意味不明の動作をする「物体」にすぎないのである。

例えば川の流れを考えてみよう。ある人がそこに着物を浸しておいて、一定時間ののち再びその場所へ行って、汚れの流し去られた着物を持ち帰ることにしているとしよう。このようなときその川はまさに「洗濯」をしている。川の流れは洗濯という意味をもつのである。しかし川の中にたまたま衣類がひっかかっているようなときを考えてみよう。たといそこに生じる物理・化学的過程がまったく同じであっても、われわれは川が洗濯しているとは言えない。そのようなときの川の流れにわれわれは何の意味も見出せないのである。周囲の状況から人間の関与が見て取れぬとき、われわれはその川の流れに「何をしている」という意味を与えることはできないのである。

これを象徴的に、「機械が～する」という言い方は「ある人がその機械で～する」の省略言明であると言い換えてもよからう。最前の例では、「洗濯機が洗濯している」は「件の主婦がその洗濯機で洗濯している」のである。同様に水車が米をつくばあい、それはおそらく或るお百姓が水車で米をついているのであり、工場の裁断機が紙を切るばあい、それは誰かがその裁断機で紙を切っているのである。しかしこれにたいして1つの反論があるだろう。裁断機の例のように、その機械を使っている人を特定できぬ場合は多くある。そのような場合なおかつ、「ある人」がその機械を使っていると言うのには無理があるのではないだろうか。だが上で示した言い換えによってわたしが主張したいのは、機械を使用している人をつねに具体的に指定できるということではない（指定できるような場合ももちろんあるが）。むしろ水車や裁断機などの機械が動いているとき、それをたんなる運動としてでなく、そこで1つの意味を持った動作（＝行為）が行われていると見るには人間の存在を前提せねばならぬということが重要なのである。

子供のころわたしはマリー・セレスト号という幽霊船の話を読んだことがある。それは洋上を漂っているのを他の船に発見されたとき、船内のあらゆる機械の動きや道具の有り様がその直前まで人々が居たかのようなであったにもかかわらず、じっさいには乗組員も乗客も1人として見出されなかったという話である。この話がかりにフィクションであったとしても、ここで感じられる無気味さは当然存在すべき人間がいっさい見出せぬことによるものであることは明らかだろう。一見意味ある機械の動きがあるにもかかわらず人間が

存在せぬことの異常さ、考えられなさがこの無気味さの根本にある。この幽霊船の話は、機械の有意味な動作に人間が不可欠であることを見事に示しているのである。

ただしこれは、(SF でよく見掛ける) 滅びた文明の遺跡の中でコンピュータが動いているのを発見するような場合とは異なることに注意せねばならない。後者はかつてそのコンピュータを使った人間が存在したであろうこと、そしてその人間が死に絶えたであろうことが周囲の状況からまず判断できる場合である。そのようなときわれわれはコンピュータの動きを見てむしろ一種の空しさを覚えるにちがいない。それは人々が滅びて今や無意味となった動作を機械がなおも続けていることにたいする感情以外ではない。しかしそれと異なりマリー・セレスト号の場合、道具や機械の動作はじっさい有意味に見えるのである。有意味に見えるからこそわれわれは空しさよりも人の居らぬ無気味さを感じるのである。機械が有意味な動作をしていること的前提には人間の存在があるのである。

それでは人気のない近代的な工場で裁断機が紙を切っているような場合はどうであろうか。このような場合、人間の存在のないところで機械が有意味な行為を遂行していると言えないだろうか。だがこれは機械を使用している人間を特定できぬことと、使用者が存在せぬことを混同しているにすぎない。おおまかに言って、機械の使用者の特定には帰責が重要な因子となる。機械を使用しているのが誰かは、それが失敗したとき誰が責任を負うかで決められる面が強い。そしてその責任の帰しかたが一意的でないばあい、その誰を特定することは難しくなる。裁断機が不調となり紙が不揃いに切れたとき、機械の操作担当者も、工場長も、またその工場をもつ会社の社長もそれぞれある種の責任を取らざるを得まい（そして責任をとる相手もそれぞれに異なるだろう）。だがこのばあい、その誰が唯一の責任者であると言うことはできない。責任のとりかたに応じて「責任者」はさまざまに設定できるからである。このようなとき往々にして、その機械を使用したのが誰かは特定しがたくなる。しかしながらこのことは、裁断機の動作を有意味にする人間が存在しないこととは別問題である。本節では、人間がいっさい存在せぬばあいでも機械が何か意味あることをしていると言えるかが問題なのである。そのように人間がいっさい前提されずに動作が行われているばあい、その機械（らしきもの）がしている「意味ある」ことが何かをわれわれは指定できるであろうか。それはできまい。つまりこの裁断機のばあい使用者が「誰」であるかは決定できないが、使用者たる人間がおよそ存在しないと結論することだけは避けねばならないのである。人気もなく機械だけが整然と稼働している近代的な工場でわれわれを感じる寒々とした思いは、人間がいっさい居らぬゆえのものとは違うのである。それは人間不在というよりむしろ人間不定の感慨なのである。

ここで検討したように、人間から独立に機械が何か意味ある行為をできるという考えは幻想である。人間を含む脈絡から切り離された「機械」は機械ではない。たしかに一見そう見える場合はある。しかしそれらはすべてその機械の動作がじつは無意味であることをあたかも有意味と見誤っているか、あるいは使用者たる唯一の人間を定められぬ場合を人間不在と誤っているかの場合かがほとんどなのである。だがわれわれはそのような問題を考えるばあい余りに当然のこととして使用者たる人間を暗黙のうちに前提している。（文明遺跡のなかで稼働するコンピュータを見る例から分るように、われわれは機械の動作に意味づけする自分という人間を自動的に脈絡のうちに読み込んで機械の動作に自分なりの意

味づけをし、それによって機械それじしんが何か意味あることをできるのだと考えてはいまいか）。そしてそれゆえにこそ、すなわち人間の存在を暗黙に前提しているからこそ、かれを暗黙のうちに消去できるのではないだろうか。「機械が行為する」と言うとき人間を簡単に無視できるということは、人間の存在があまりに当然のこととして前提されている賜物なのである。

#### IV.

わたしがこれまで述べてきたことをまとめればこうである。われわれは動作の多少と「その場」性によって行為者を決定する1つの傾向がある。そしてその基準によって定義すれば、人間も機械も同等の行為者となりうるという結論が得られる。すなわち「機械が～している」という言い方と「人間が～している」という言い方とは同じ意味を持ちうると言える。しかし現にわれわれが行為という事実をどのようなものとして作り出しているかを見るかぎり、「機械が～している」と言われる場合にも人は～していないわけではなく、また逆に、機械がそれ自身で～しているのではない。つまり「機械が～している」とは機械それ自身が人間がそれをするのと同じ意味で「～している」のではなく、いわば暗黙の使用者としての人間の存在が機械の動作に「～している」という意味を与えんと言うことであった。そしてその点で、機械（道具）が行為するという言い方は人間が行為するという言い方とは大きく意味が異なっているのである。

だがすでに述べたように、わたしがここで指摘したいのは機械を行為主体とする言い方それ自体が誤っているということではない。それはそれで1つの言い方であり、1つの定義にもとづいて行為者を定める1つのやりかたである。その言い方を廃止せよとわたしは言っているのではない。むしろわたしが指摘したいのはその言い方から1つの誤解が生じることである。具体的に言えば、機械が人間と同じ意味で行為する者となるという誤解が生じるのである。じっさい「機械が行為する」という言い方と「人間が行為する」という言い方が全く同じ構造を持つと考えれば、機械と人間とが全く同じ意味で行為しようと考えられる。するとそこから無くもがなな擬似問題が多々生じる。わたしはそれを消去したいのである。

そのような擬似問題の代表は心の哲学におけるいわゆる人間機械論、それも一昔前の単純な物理主義（心脳同一説）にかわって登場した機能主義的な物理主義によるそれである。かつての心脳同一論者の人間機械論はこう主張した。機械の性能向上とともに人間自身が担ってきた動作をすべて機械に任せるとも可能となろう。他方機械の自動化の進歩により、人間は機械の動作場所に居なくてよいことになる。すると人間がそれまで行ってきた行為を機械がしていると言ってよいであろう。ところが機械の動作は全て物理・化学的に記述することができる。それゆえ人間の行為は基本的に物理・化学的に記述できるというわけである。ところがこの種の行き方が批判されたのは、機械の働き（＝機能、すなわち動作の意味）が物理・化学的には記述できぬという点であった。そこでそれまでの物理・化学的タームのほかにシステムの「機能」というタームを導入し、その両者によって人間の営為を記述しつくそうという新しい人間機械論が起こってきた。それが機能主義的

な物理主義である。この種の行き方で現在もっとも衆目を集めているのは、心のはたらきをコンピュータの動作とのアナロジーで分析しようとする動きである。この運動は「認知心理学」の隆盛と軌を一にして、現在のこころの哲学にたいして大きな力を及ぼしつつある。たしかにここでは心のはたらきを単純に物理過程に還元する誤りは避けられている。その点で古い物理主義とかれらの運動とを同列に扱うのはあまりな単純化と言えるであろう。じっさいここでは物理学的記述とはいちおう別カテゴリーにぞくする「機能」の概念が定義され、こころの動きはたとえばコンピュータの「機能」との類比によって説明されるからである。しかしそれにしても、ここにはなおかつ無批判に受け入れられている1つの前提があるのではないだろうか。それは機械が人間と同じいみで行為できる、すなわち機械が人間と同じ意味で洗濯し、煮炊きし、紙を切り、計算し、思考することが可能だということである。換言すれば機械がある動作をするとき、その動作それしんに意味がそなわっているというのである。しかしその背後には、動作と行為の混同があるのではないか。かれらは機械の機能とこころのはたらきとを等置するが、その前提には、機械がそれ自身で人間と同等の行為者となりうるという暗黙の了解がないであろうか。そしてそれに問題はないのだろうかとわたしは考えるのである。

これまでわたしは、機械の動作がそれ自体として意味を持つ「行為」とはならぬことを述べてきた。さらにわたしは洗濯機が洗濯することは主婦が洗濯するばあいと異なり、かならずそれを「洗濯」と意味づける当の機械以外の人間が必要であることを指摘した。同様にコンピュータが「計算」するばあいも人工頭脳が「思考する」ばあいも、その動作が「計算」であり「思考」であると意味づけるには何らかの人間が前提されねばならないのである。要するに、機械が人間の存在を前提せずそれ自体として意味ある行為をすることは不可能であり、そのいみで「機械の行為」と言われるものは人間のそれと基本的に異なるということ、それがこれまでの論点であった。換言すれば、かれらの言う「機能」概念が成立するには人間の存在が必要であるが、まさにそのことがコンピュータの「計算」を人間の計算から差別するものとなっているのである。そのように、この種の人間機械論が前提していた機械の「行為」と人間の行為はけっして同じ意味のものではない（カテゴリー・ミステイク）のであり、それゆえ例えば人間の思考を機械のそれによって類比しようとする試みもまた、それと同種の誤りを含むものと言わざるを得ないのである。

このカテゴリー・ミステイク論にたいしては人間機械論の側から1つの典型的な反論がある。それはかつて R.ローティが心脳同一説の擁護として提出した「消滅理論 disappearance theory」である。かれの主張を要約すればこうである。われわれはたしかに現在上述の基準に従って動作の意味の有無を決めているかも知れぬ。だがこれから技術が進歩するにつれて、動作の多少およびその場性という新たな基準を採用することにすれば、機械も「行為する」と言って良い時代が来るであろう。要はどのような基準にもとづいて言葉を使うかという馴れの問題にすぎないというのである。

しかしこれは一種の自殺論法であるように思われる。たしかにかれらの言うように、ある言葉の定義を変えることで機械も「行為する」ことが出来るようになるであろう。だが第1にそこで言われる「行為」は現在のそれと全く意味が異なる。それゆえ現在生じている問題がそこで生じないにしても、現在の問題が消滅したわけではないのである。しかも

これまで見たように、機械の動作はそれじしん意味的にはニュートラルである。そのような意味的にゼロな動作をその場でいくら多くしたからと言って、その機械が何をしているかが決定できるのであろうか。換言すればそのような言語で（現在のわれわれの言語でなされているような）動作の意味づけがなしうるであろうか。最前わたしは物理的動作が同じであっても行為としては異なりうる例を挙げた。それは現在のわれわれの言語（それがわれわれの行為という事実を作り出している）でこそありうることである。しかしここで提案されている言語では、そのような行為の異なりはいっさい許容されないであろう。なぜならそうしなければ同じ動作をその場で同じだけしたにもかかわらず、行為としてはゼロないしマイナスである状況を認めねばならないからである。動作をどれだけしても行為は無い、あるいは逆の行為をしていることが生じてくるのである。だがそれを避けようとしてある動作の多少・その場性にかかわらずそれらが行為として別だと言うなら、かれらは動作の多少とその場性以外の基準による、動作の「意味づけ」を認めたことになる。それではわれわれの現行の言語でなされていることと実質的に何ら変わりはない。それゆえそのような「意味づけ」をかれらはいっさい認めることはできない。するとかれらの立場では、1つの動作の意味は（動作から自動的に定まる）1つに限らざるをえまい。このように考えるとそのような試みは現行の言語に比べて、おそらく極端な表現力の低下をもたらすのみであろう。それならば現在の問題を消去するだけのために、そのような貧弱な表現力しか持たぬ新たな言語を採用し、行為を定義しなおす必要がどこにあるのだろうか。むしろわれわれは、行為について豊かな事実を作り出している現行の言語に従うべきではあるまいか。

しかしわたしは、コンピュータが人間より迅速に計算し、卵の不良品選別機が人間より正確に不良卵を見つけ出す等々のことを否定してはいない。ある動作に計算ないし不良卵選別という意味がいったん与えられさえすれば、その動作を人間より迅速に正確に行うものがあることは一向に不思議ではない。またそれこそが人間が機械を工夫する意義である。これまでは、ある動作をいくら速くこなしたとしても、人間の存在によってその動作に意味が与えられなければその機械は何をしているかは分らないことを述べてきた。だがその一方で、これまで述べて来なかった重要なことがある。それはある行為という文脈がいったん定まったならば、機械も人間の身体部分もその動作を請負うものとして実際同等と言える場合があることである。例えば「計算する」という行為を考えてみよう。計算をするにもさまざまなやり方がある。暗算で、紙と鉛筆を使って、算盤をはじいて、電卓で、あるいは大型のコンピュータを用いて等々である。しかし計算を遂行するための動作という点からみると、脳味噌のなかで生じる過程も、紙上に数を書いてゆく腕の動きも、算盤玉の上下も、あるいはコンピュータ中に生じる電子の動きもみな同等であると言える。じっさい計算を遂行する上でそれらは互いに代替可能な動作だからである。同様に洗濯をするさいどのような機械を用いても、あるいは身一つでしようとも、洗濯という行為が遂行されたことに変わりはない。通勤にとって電車と足は能率の差こそあれ同等である。団扇を動かす腕もエアコンも涼みにとっては代替可能な手段として同等である。つまりある行為がさまざまな動作によって遂行されうるということの別表現として、動作の同等性あるいは代替性が成り立ちうるのである。

そして計算のための動作を行うものとしての同等性という枠内でみるかぎり、そこでは脳とコンピュータは代替可能な位置を持つ。これを象徴的に表現すれば、ある人が「脳で」計算するのも「コンピュータで」計算するのも、その人の計算に変わりはないと言えよう。もちろん脳で計算するばあい脳の動作はその人の身体部分のそれであり、それゆえかれが脳の動作と別の場所にいることは（ふつう）できない。それにたいしコンピュータによる計算のばあい、かれは動作の大部分を機械に任せられ、しかもかれがその機械の動作場所に居合わせる必要は必ずしもない。そのいみで、かれの計算行為の中に両者が占める位置は異なっている。しかし繰り返し言ってきたように、このいみでの位置の異なりはあくまでも彼の計算におけるそれであり、コンピュータが彼と独立に計算していることを意味しない。むしろそれとまったく別の理由、すなわちかれの計算行為という事実がいったん確立された以上その動作を担うものとして同等だということから、脳の働きとコンピュータの働らきを類比させることが可能となるのである。だがここで注意せねばならぬのは、脳は彼ではないことである。かれの脳はどこまでも、動作するものであるが行為するものではない。そしてその動作に意味を与えるのは人間たる彼の存在である。われわれは人間を前提するゆえに脳の働きに一定の意味を与えることができるのである。（未知の生物中でどんな過程が生じているかは分っても、その意味が分るだろうか）そのいみで、脳とコンピュータの機能上の類比を語れる根拠は人間なのである。コンピュータによる心の解析は脳と物体の直接の類比によって保証されるのではない。それは人間という還元不可能な平面を認めた上での、身体と道具（機械）の類比を根拠として成り立つのである。

それゆえわたしは、脳の働きをコンピュータと類比する方法で心のはたらきが解明されるとは思えない。なぜならそこには、はたらきそのものを定義する「人間」という未定義概念があるからである。じっさい心とは人間のそれであり、心のはたらきは人間にとって何の働きであるかという以外の言葉で語ることはできない。いま人間の心の働きを脳やコンピュータのはたらきで説明しようとも、脳のあるいはコンピュータの動作に一定の機能を与える「人間」そのものが分らなければ何が分ったことになるのであろうか。ある行為のための動作をするものはさまざまありうる。しかしその動作を（意味ある）行為の一部として、何か意味ある働きをしていると言えるには人間を含む脈絡が必要である。こう考えれば物理・化学的に描写すれば一通りにしかならぬ（脳やその他の身体部分の）動作を、千変万化に意味づける人間という存在こそが不思議の中心なのである。われわれは性急に心のはたらきをコンピュータのそれと類比させ、それによって心が分ったと即断してはならない。こころあるいは脳の「はたらき」それじしんを意味づける原理としての人間は何も分っていないのである。脳の探究はコンピュータの探究であってもよい。しかし心の探究は人間の探究なのである。

（昭和62年12月9日受理）